

務川慧悟さん(ピアノ)応援レポート

シャネル・ピグマリオン・デイズ2017

2017年5月6日(日)14:00開演

シャネル・ネクサス・ホール

「ピグマリオン」という言葉は、ギリシャ神話に語源を持ち、才能を信じ、支援して開花させるという意味がある。「シャネル・ピグマリオン・デイズ」は、このスピリットに基づき、シャネル・ネクサス・ホールで若手のアーティストに演奏する機会を提供するプログラム。2017年はバイオリニスト1名、チェリスト1名、ピアニスト2名、ソプラノ1名を支援している。

この日は、2017年のアーティストに選ばれた務川慧悟さんの今年3回目のリサイタル。このホールでのリサイタルは、アーティストとの距離が近く、アーティストの指の動きや息遣いが手に取るようにわかる。曲の合間にはアーティストによるトークもあり、アーティストの人柄、個性を垣間見ることができる。広いホールのコンサートももちろん素晴らしいが、このようなリサイタルは、アーティストやその演奏に身近に触れられ、また違った楽しみ方ができる。

今日のプログラムの選曲、構成は、務川さん自身によるもの。務川さんが現在通うパリ国立高等音楽院出身であり、昔から大好きなラヴェルの曲を中心に据え、更にその作品に関連性のある別の作曲家の曲を配したとのこと。

最初のラヴェルの2曲は、「ボロディン風に」と「シャブリエ風に」。他の作曲家を真似て作曲することにより独特な味が出るため、それを味わって欲しくて選んだとのこと。

メンデルスゾーンの「スコットランド風ソナタ」は、のどかで素朴、時には荒々しいスコットランドの風景を描いた曲で、バグパイプを思わせる旋律も重々しく響く。

バラキレフの「イスラメイ」は、ピアノ曲史上最も難しい曲の一つと言われていて、務川さんがこれまで弾いた曲の中でも最も難しい曲とのこと。それでも、力強く、堂々と弾ききった。



2017. 5. 6 CHANEL Pygmalion Days PROGRAM

務川 慧悟 (ピアノ)

ラヴェル
ボロディン風に
シャブリエ風に

Ravel
À la manière de Borodine
À la manière de Chabrier

メンデルスゾーン
幻想曲 嬰へ短調 作品28 「スコットランド風ソナタ」

Mendelssohn
Fantasie in F-sharp minor, Op. 28 "Sonate écossaise"

I. Con moto agitato
II. Allegro con moto
III. Presto

バラキレフ
東洋風幻想曲《イスラメイ》

Balakirev
Islamey: Fantaisie orientale

- 休憩 -

ラヴェル
水の戯れ

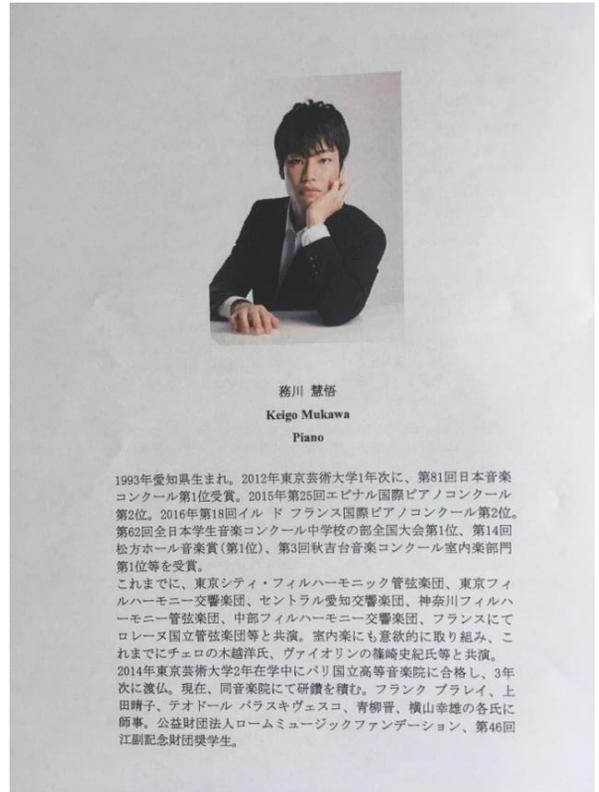
Ravel
Jeux d'eau

リスト
《巡礼の年 第3年》より「エステ荘の噴水」
《2つの伝説》より「波の上を渡るパオラの聖フランチェスコ」

Liszt
"Les jeux d'eau à la Villa d'Este"
from "Années de pèlerinage Troisième année, S. 163"
"St François de Paule: marchant sur les flots"
from "Légendes, S. 175"

休憩の後、もう一つのラヴェルの曲は、「水の戯れ」。ドビッシェより先に、印象派を確立したと言われた曲。そしてラヴェルがパリ国立高等音楽院在学中に作った曲とのこと。水と言っても澄んだ湧水、小川のせせらぎ、荒々しい大河、渦を巻く水、寄せては引く波等、それらが頭に浮かぶ演奏だった。

最後のリストの曲は、ラヴェルの「水の戯れ」に影響を与えた曲で、やはり水がテーマ。確かに、務川さんが「熟考した」と語った選曲、構成だった。アーティストの選曲、構成のねらいを本人の口から直接聴けたのが、興味深かった。今回は10月と、少し間が空いてしまうが、今回の選曲、構成が楽しみだ。



Q&A

今日のプログラム、演奏についてご本人に直接お聞きしたところ、とても丁寧な回答をいただきました。音楽に対する真摯な姿勢がひしひしと伝わってきます。必読！！

Q1 あるサイトに務川さんが書いていらっやっただのですが、「2017年、メインとなるのはシャネル・ピグマリオン・ティズの6回のリサイタルで、パリで最も時間を割いて勉強している作曲家ラヴェルのピアノソロ作品全曲を6回に分けて弾きつつ、それぞれの作品に関連性のある別の作曲家の作品をうまく組み合わせることでプログラミングしていく。」とありました。今回、メンデルスゾーン、パラキレフ、リストを組み合わせられたのはどういう関連性があったのでしょうか。

今回のプログラミングの意図は少し独特ですが、前半が“～風”とタイトルの付く作品、後半が「水の音楽と印象派の興り」となっていました。“～風”というタイトルの付く作品は、謂わば作曲家が、自分の持つ作曲語法“以外”の作曲語法やスタイルを模倣して書いた作品だと言うことができ、そのような作品には、2つの異なるスタイルが少しずつ混じりあったかのような独特な雰囲気の魅力となって表れてくると考えています。その独特な魅力を持つ作品のみを並べる、という珍しい試みを前半では意図しました。

後半。ピアノにおける印象音楽のおこりはラヴェルの「水の戯れ」によると言われることがありますが、その作曲に多大な影響を与えたとされるリストの晩年の傑作「エステ荘の噴水」、さらにはそれより十数年前に書かれた、同じく水をテーマとした「伝説第2番」を組み合わせることで、作品により異なるさまざまな水の描写を味わって頂くとともに、印象派が興るまでの時代の流れを大まかに描き出そうとしました。



Q2 ラヴェルを一番時間を割いて勉強している、とありますが、何故ラヴェルなのですか？

ラヴェルの勉強に最も時間を割いている理由は非常にシンプルで、ラヴェルが今最も好きな作曲家だから、ということになります。ではなぜラヴェルが好きなのか、ということになると少し説明が難しくなります。

今から2年半前にパリに来て以来、音楽を聴きながらパリの街を散歩するのが趣味の1つとなっていますが、パリに来て初めての冬、パリの冬は晴れることがほとんど無い、長く暗く厳しいものなのですが、そのパリの冬と慣れない留学生活の苦労とが合わさり、心が落ち込み、立ち直るのが難しいくらいに孤独を感じてしまっていた時期がありました。

そんな時、どこか常に哀しみをまとったようなラヴェルのピアノ曲に冬のパリの哀しそうな空が、また禁欲的なラヴェルのピアノ曲とパリ独特の少しモノクロがかかった街並みがとてもよくマッチしたことから、ラヴェルのピアノ曲を聴きながら冬のパリを散歩し、感傷に浸ることが僕の日課となり、ラヴェルのピアノ曲が僕の心を慰め、支えてくれた、そんな時期があったのです。それがきっかけとなり、その後どんどんラヴェルの魅力にのめり込んで行きました。

だから今でも、パリの街並みを眺めて思い出す音楽はラヴェルであるし、ラヴェルを弾きながら思い出す風景は、少し哀しそうな冬のパリの風景です。



Q3 今日は、どんな演奏をめざして弾かれたのですか？

人前で作品を演奏する際、最も根底にあるべき意識「作品のあるべき姿を体現するよう努めること」以外にもう1つ、「自分の演奏でひとが喜ぶのか否か」という点を常に意識している自分がかつてはいました。

が、ここ数ヶ月の間で、とあるきっかけもあり、その考えから脱出することを試みています。すなわち、他人からの評価に頼らず、自分の感覚を最も重要なものとする、ということ。それが成り立つためには、他者の自分に対する評価以上に、自己の自己に対する評価を厳しくし、自分が自分に1番厳しく生きていかなければならない、という大前提がありますが、その大前提を踏まえた上で、他人ではなく自分が最も感動できる弾き方をする、という姿勢を今試みています。

そうすることで生み出される魅力に人が付いてくる。そんな生き方が出来たら理想的だと、今現時点では思うようになりました。人が何をどう感じているかという感覚は、決して味わうことはできないのですから... その意味で今回は、自分がこうだと思う弾き方を貫くことが目標にありましたが、そのことは普段より少しだけ達成できたのではないかと思います。

コンサート会場でお話したり、トークを聴いていると、まだ若い普通の青年に見える務川さんと、堂々とした、素晴らしい演奏をし、音楽について熱く語る務川さんとのギャップに驚かされます。務川さんのようなすばらしい演奏家がどうやって育つのか、今回の演奏とは別に、その秘密を探りたいという探究心が頭をもたげ、務川さんに追加の質問をお願いしました。これも必読！！

Q1 務川さんがピアノを始めたきっかけは何だったのですか？

よくあるきっかけかもしれませんが、母が自宅でピアノの先生をしていたことです。生まれた時、既に家には大きなグランドピアノがあり、物心ついた頃には僕はそれをおもちゃの1つにして遊んでいました。

こうしてピアノを遊びの1つとして始めた後、まずは母からきちんとした弾き方を教わるようになりました。母はとりわけ子供に教えることを得意としていましたので、その点ではかなり幸運でした。幼い頃に適切な訓練を受けることができ、母には感謝しています。

Q2 ここまでピアノを続けてこられて、今の務川さんを作り上げた最大のものは何だと思われませんか？

これは、ピアノ・音楽が心の底から好きだということ。この点がもちろんのことながら常に大前提にあり、非常に大きなものとしてありますが、これはどちらかという子供頃の僕がピアノを続けてきた最大の理由にはなりません。しかし、こうして人前で日常的に演奏をするようになった今、この理由は第2番目に置かれるものとなりました。



ラヴェルのピアノ曲に癒され、今ではすっかりバリになじんだ様子の最近の務川さん

今、この大きな理由を差し置いて、最も重要な位置に置くことのできる理由は、「僕の演奏を聴いて下さる方がいるということ、僕の演奏を聴いて、何かしらを感じてくれる方々がいるということ」になります。

音楽の偉大さと、常にそこに到達することの出来ない弱い自分(この自分は一生継続ものだと覚悟を決めています)。その弱い自分に正面から向き合ってゆく作業、これは音楽をただ好きだというだけではなかなか出来ないことだと、個人的には思っています。

自分の弱さを知り、その弱さと徹底的に向き合ってゆく覚悟、これを持つか持たないかが、僕にとってはプロか否かの境目であり、その覚悟を持って生きていくのには、楽しみだけではなくいくらかの辛さも常に伴うと思っています。

その辛さを乗り越える支えとなっているのが、僕の演奏を聴いて下さる人がいること、聴きたいと思って下さる人がいること、そしてそれに対する喜びと責任、なのです。

Q3 すばらしい演奏家を作るものは何だと思えますか？

僕が、将来いつの日か素晴らしい演奏家になれば、と憧れる中で、この質問に対しては、自分なりの推測でしか答えることができません。

「才能」という説明をつけることの出来ない要素はここでは一旦除いて考えるとしましょう。僕自身は常に僕を取り巻く僕以外の音楽仲間と比べて自分が才能に恵まれていると感じたことはあまりありませんが、そのような不器用な僕は、他人以上とは言わないまでも、他人に劣らぬくらいの努力は常に積んできた、という実感はあります。

さて、音楽対して真摯になり、必要な努力を必要なだけ積むことができたと仮定して(努力という苦しみながら行うもの、というイメージになりがちなのでもしかしたら「訓練」と言ったほうがよいかもしれませんが)、その努力・訓練の結果、音楽能力を一定の歩幅分、前進させることができたとしても、その前進の方向性はやはり人によって多種多様です。ここで問題になるのが、その人の「人間」だと思います。

(このように分かりやすい例は実際には有り得ませんが)強いて分かりやすい例を挙げるとするならば、100通りの演奏方法を知り、全てを自分のものとなるまで完全に習得し切ったとして、その100通りの中から最後、1通りを決めるのは自分の趣味であり、感情であり、言わば人間性です。

まとめると、僕の考える、“才能を除いて”、素晴らしい演奏家を作るために重要な要素は、**1. 努力**(ただし、必要な類の努力であり、必要な量でもあること)、そして**2. 人間性**。そして、2つ目の人間性の方が、僕の予想では遥かに奥深く、曖昧で、得るのが困難なものなのだと思います。

務川さんの回答からは、温厚な表情の裏にある、内に秘めた強さを感じました。(これは、トークの時の柔らかさと、バラキレフの「イスラメイ」を演奏している時の力強さとのギャップに似ています。)聴いてくれる人に感謝し、大事にする温かさを感じると同時に、演奏において試行錯誤を重ね、音楽を極めることに対する覚悟もできている。この強さと覚悟があれば、これから直面するであろう困難も乗り越えていける。これからの務川さんの成長を追いかけ、見届けたい。

豆知識

モーリス・ラヴェル

(1875年3月7日ー1937年12月28日)

6歳の頃からピアノを習う。

12歳の時シャルル・ルネに和声、対位法を師事、作曲を始める。14歳にしてパリ音楽院のピアノ科予備クラスに入学。16歳からピアノ本科でベリオに学び、「古風なメヌエット」や「ハバネラ」を作曲していく。

1928年、アメリカに招かれ、ボストン交響楽団を指揮。この頃から指揮活動も盛んになっていく。同年、アメリカから帰国後、バレエ「ボレロ」を作曲。

1932年、不慮の自動車事故で頭を負傷。34年から転地療法をするが、作曲はおろか、文字すら書けなくなっていた。

1937年、パリで脳の手術を受けるが、術後9日目、62年の生涯を閉じた。

オーケストレーションは職人の域で、ムソルグスキーの「展覧会の絵」では見事なアレンジをし、ムソルグスキーという作曲家の存在を世に知らしめた功績も大きい。(クラシック作曲家ファイル、ドレミ楽譜出版社より抜粋)

